

# ミオヤの光

安心の巻

○安心

所歸（歸命信賴する所の本尊）

自己は無知無力たゞ罪惡のみと知る

歸命すべき獨尊を宗教意識に安置す

如來の報應身としての本尊

こゝろに常に本尊を安置して

所求（終局目的の所求によりて安住を得る）

去行

○感情の親愛

異性相愛

如來の妙色身は大愛の化現

靈の愛

靈の戀（靈戀は人を神化する）

○彌陀の本願

○慈悲の御親

○法喜禪悅

## 安心

宗教的意識の確乎と決定した常恒不動の心理状態を安心と云ふ。安心は宗教意識の生命なり。故に未だ安心決定せざるものは宗教の生活に入らざるものと云ふべし。いましばらく安心てふものゝ意義を解説せんと欲す。乞ふ聞しめされよ。

安心の文字の解は安心とは安置心、安住心の二義あり。また古來の傳ふる處によれば安心とは所歸、所求、去行を確かに思ひ定むるを云ふ。

所歸とは安置心即ち自己の宗教意識に唯一獨尊なる歸命信賴すべきものを定めて自己の宗教意識を安置する義也。

所求とは自己の精神心情の安住する處を定め置くことなり。

去行とはささりゆく即ち人の生れつきの現在の心の安住する處は自己の迷とまた罪惡と苦惱とに依りて成立したるものなれば、この心理状態をさりとていと清きいと安き靈國に更り行くべき修行のことなり。これを猶委しく説明せん。

## 所歸——歸命信賴する處の本尊。

所歸とは宇宙間に於て唯一獨尊なる一切に超越せる處の神尊一切萬物を統御するところの靈格萬法の歸趣する處のこの唯一なる神尊に歸命するにあらざれば他に救靈の道あることなし。故に全心全幅を擧げて歸命信賴するものなり。

此唯一獨尊なる神尊をアミダ如來と號し奉る。佛教に諸佛はさつの名號甚だ多しといへどもみなミダ一佛の分身にして無量諸佛本源に歸する時は唯一體なり。彌陀と一切諸佛とはたごへば一月天に在りて影萬水に浮ぶが如く、百川萬江の浮べる月にありて異なるにあらず。

一切諸佛は彌陀一佛の應用の化現、彌陀の靈知と靈能とによりて一切衆生を救靈せんが爲めの分身なれば本ミダを離れたる諸佛にあらず。然れども本に歸すれば唯一の獨尊なれば全心を投じて歸命し全力を竭して仕えまつるべきはひとり彌陀如來のみ。

## 自己は無知無力たゞ罪惡のみと識る

吾人自己の心中に歸命信賴すべき本尊いまだ安置せざるむかしをしのふ時は實に自ら恥し自から恐る、むかしの生れしまゝの我心のあさましさよ。而にこそあらはれね、いかり憎、嫉、橋、貪、などのすべての罪惡の要素として心裏に見えざるなし。すべての煩惱の種子内に伏在すればこそ機會にふれ縁に對して競ひ起り己を害し他をなやめ罪をつくること極りなしさればこそ聖典には「煩惱の毒蛇睡りて汝の胸に在り黒蛇の室に在て眠るが如し」と吾人の胸中に眠伏せるものゝ毒蛇は外界の刺激にふるれば忽ちに覺醒して罪惡を顯動す。かゝる罪惡の巨魁を自我とは名づく。此の自我を主人公とし獨尊として我意、私慾若しは主觀に若しは客觀に於て惡として造らざるなし。此の罪惡の源なる自我を中心とし本尊として過しゆかばいつか迷ひの里を出て罪惡の源を斷つことを得べき。この自我を主人公として精神生活せるものを迷の凡夫とは云ふ。いまだ宗教の生命に入らざるものと名く。

## 歸命すべき獨尊を宗教意識に安置す

さて吾人は曾て無明にさまよひ魔王の奴となりて空しく貧里に苦しめるも教主世尊の聖きみをしへによりて唯一の尊なる父の大なる靈能と大なる慈愛とを聞きしより、いまはむかし非をさとり悔あらためて慈父に歸することを得たり。能く阿彌陀如來の眞理を知るときは宇宙は全體如來の中にあり。

如來は宇宙の最勝者なり。如來は宇宙の統攝者なり。如來は宇宙の無上權威者なり。如來は宇宙萬法の一大原則の基礎なり。如來は一切を救濟する大力者なり。

吾人は無知なり無力なり。從來自からの力にて活きるものと謂ひ來りしはその實然らず。宇宙の全體なる如來に活かされしなり。我等は曾つて自から知ありと謂へり。その實は宇宙の全智なる如來より與られし外に我智あることなし。ことに我等の智はわづかなる身によりてかすかにほたる火だにあらざりしなり。我らは如來を離れては此身も生命も精神もすべてなきものなり。

如來は我身と生命と精神とを我に賦與し給ふことは何の爲ぞや。我に永恒の生命と無上の靈智に入らしめんが爲めなりと聞けり。いかにして永劫の生命と無限の光りに入ることをうべき。ぞこれ己を空ふし我をすて、永恒のいのちなる無限の光なる如來に歸命信賴するなり。我全心を盡して如來の眞我の中に投歸没入するなり。

我從來の主我中心の生命を亡ふして如來の中に生れ更なるなり。如來の中に生れ更し時には從來の我にあらざるなり。

如來の中に歸命し依屬せる我は永恒の生命なり。無量壽なり。無量光なり。

### 如來の報應身としての本尊

如來は光明普ねく十方世界を照して衆生の念する心を攝取し給ふ。

如來は我等のいける本尊なり。いま此身が太陽の力によりていける如く衆生心靈は如來の靈能によりて靈活せるなり。如來は我等がいける本尊として常に離るることなきなり。我むかしは未だ曾て知らざりき如來の大慈悲は常に衆生を攝取し給ふことをまた如來の光明はとこしなへに衆生を照し給ふことを。

いまは諦かに信知す。如來の光明は夜も晝もとこしなへに衆生を照し給ふことを

如來の恩寵はいつも衆生心をつくしみ給ふことを。

衆生聖名を稱ふことは如來は聞き給へり。如來を敬禮することも如來は視給ふ。衆生念じ奉ることを如來は知りたまへり。

吾人むかし曾て阿彌陀經をよみ奉りて阿彌陀佛現にましまして説法し給ふといふことは、生らが死してかの國に生れて後に妙法を聞くものなりとおもひき。いまはおもふ。不然からざるなりと。今吾人に對して現に在して説法し給ふなり。

眞佛甚深微妙の聲は肉耳を以て聞くべからず。但心靈の耳を以て初めて無聲の聲を聞く事をうべし。

如來は常恒に法を説きたまへり。我が信心かたむけるとき如來の眞音妙にひびけるを聞く。我悲しむとき如來は大慈悲を以て慰藉し給へり。我いかるとき如來は愛語をもて我をなだめ給ふ。

吾らがすべての惱にも如來の慈顔をおもひ奉らば忽ちに歡喜を感じいかなる逆境のなかにも吾に平和と安穩とを與え給ふ。

吾本尊はいづれの處に於いても離るることなし。行住座臥にへだつことなし。吾必靈界に如來は安置し給ふ。

しかれども吾はまた世のくさくさの爲に如來の照鑑し給ふことを忘るることなき能はず。かの聖き名を稱ふるとき如來は吾が心に映現し給ふ故に常にいける本尊をここに安置すべきなり。吾この身心は如來の靈應を安置し奉るごころの宮なり。

吾ら肉體をもてるほどは一重の障をへだて、如來を觀見し上るなり。心眼にはさとりなきもいまだ佛眼をえざるときはまだ一分のさわりなきこと能はざるなり。

若しこの穢身をさりて佛眼開けし時眞佛如來を如實に知見することをうるなり。

### こゝろにつねに本尊を安置して

吾は曾て謂ひたりき。こゝに於て命終り瞑目して後初めて涅槃界に安住することをうるものならんと。

否なり。如來の眞境は心靈界なり。俗に所謂冥途と云ふ如きものにあらざるなり。

此を去りて彼處に發見すべきものにあらず。吾人は生れつきの我の所感をして、正しく如來の中に投歸投入するとき如來の大恩寵の融合せるとき、從來の主我の安住する心情を超えて小我中心の生命を捨て如來の中に生れ更りしとき已に我信心はこのまゝ如來の靈界に轉生したるなり。これを有餘涅槃と云ふ。即ちこの有餘依の肉身はかわらざれども神は淨土に栖みあそぶことなり。このかたちを有しながら理想の極樂に安住するなり。

このかたちを實物と認むればこそ生死の怖れあり。かたちと迷の我てふことをはなれて如來の中なる真我を我と信認するときは本來は無量壽ならずや。

肉眼に七重寶樹や八功德池見えざればとて是極樂にあらずと云ふことを休めよ。吾人自己のはからひをして、如來を信念し清淨莊嚴の觀に入るときは七寶の靈國は吾人理想の前に彷彿たり吾人は今は無量光明土に逍遙としてあそべり。

吾人は又百味の飲食この肉のために味ふことあたはざるが故に心靈は極樂に安住せるものならずとおもはざるなり。我ら我をして、如來の恩寵を觀する時法喜禪悅の妙味げに極りなく味ふ事を得ればなり。吾人は口腹の味は飽くことあるも三味禪味は微妙にしてあくことを知らざるを覺ゆるなり。

歸命信賴して之に一任しこの指導のまことに奉仕することを得ばこれを所歸の本尊を宗教意識に安置し奉つるとは爲す。

## 所 求 — 終局目的の所求によりて安住をうる

所歸の本尊を安置してこれによりて心靈の生活をうるを安心の一面とせば常住の不變の靈界を求めて心情の安住する處を所求の境とす。

何故に吾人は常住の安住處を求むべきやとならば吾人の天然の生活なる身心と現に依止する世界の規定とは決して永恒の安住をゆるさざるなり。現世界は畢竟の安心を吾に與へざるなり。

吾肉眼の見る處の世界は轉變極りなきなり。いま吾々の身は老病死苦免れざるなりこれを思惟する時は吾は不安の情に堪えざるなり。吾らは如何にして生死を超絶して

不生不滅の眞界に超生することをうべきぞ。我はこれを求めて止まざるなり。こゝに於て教主世尊の勅に隨うて不死の門は開けたり涅槃の城はあらはれたり。聖き御名により聖き旨によりて眞如の都にいたることを念佛三昧によりて蓮華藏界に入ることをうるなり。眞善美の靈界に安住することをうるなり。如來の眞境に常住することを得るなり。

吾人はすべての吾同胞にすゝめて止ざるなり。さかく從來の我によりてすむ處のこゝろのすまぬ處を轉じて如來の安樂土に安住せられんことをと。世の人々を見るにたとへ形骸には綺羅の美を纏うて金殿玉樓に榮花をほこるも神はつねに三惡道に流轉し即ち一念瞋恚のほむらをもやせば即ち心はならくの境界を現はしなかに墮するなり。貪欲こゝろを惱ますは何ぞそれ餓鬼にあらざらん。嫉憎愚痴高慢或は烈火胸をこがし鬻水こゝろを浸す日々三惡のなかに循環し念々六道のちまたにさまよふ。ア、憐むべし。傷むべし。何ぞかゝるあさましき心情をすて、如來清淨の處に安心を求めざる。

現に今此心一念彌陀にあれば一念の淨土一刻如來にあれば一刻の極樂。極樂遠からず今は此一念のぐらして如來のなかに安立する時即ちこれ無量光土なり昨日までの娑婆にすめる心機を一轉して淨土に超生する時は自己の心性一新し人格一變するが故に天地もまた一變し乾坤もこれ昨日のそれと異れり。萬物光輝を發し事々希香を生ず。

濁聞般若經思樂念食無生即斷飢。  
ア、樂し、げに極樂のなかに安住する心情は。ア、歡ばし、極樂に逍遙して極りなき理想のはどは。

世の人々よ。何ぞよしなきこゝろを捨て、この如來のみむねのなかにすみかえぬぞ。吾人はこの有餘の依身のあらんかぎり神は如來の極樂蓮華藏界にすみあそびてこの依身を蟬の如くに脱する時は無餘涅槃と云ふて實在の極樂涅槃界に歸入するなり。

## 去 行

一一一

全心全幅を擧げて歸命信順する處の唯一の本尊を宗教意識に安置すべきこと、及び最終の求むる處なる眞善美の極樂に心情を安住すべきことをば已に明しぬ。吾人はいかに心を致しいかに修行せば従前の心情の安せし處より轉じてこの身は存しながら神は極樂に安住することを得べきぞ。これを去行とす。その法要を聞かむと欲す。

去行につきては五種聖行等。即ち一心に専ら聖經をよみ、一心に専ら如來を禮し、一心に専ら如來及び清淨國土を冥想觀念し、一心に専ら如來の聖德を讚美しまた供養する等、要する處は、専ら如來の恩寵と自己の信仰とによりて相互の關係を親密にし如來の聖寵吾人の信念に靈應し、吾人の信心に如來の聖意交感し彼此交渉感應致一し我れ如來に入り如來我に入り、己が心を空うし如來の聖意によりて自己の心意にみらしめ、ついに吾が心を轉じて如來の聖寵によりてアナタの聖德に靈化するにあり。

而ればいかゞせば吾人の心は解脫靈化することを得べきぞとならば、善導大師の曰く、一心に専ら彌陀の名號を念じ行住座臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるものを之を正定の業と名づく彼佛の願に順するが故に。

要する處は、口に聖名を稱ふるは意に聖寵を憶念せんが爲めなり。意常に如來を憶念する時は念々如來が捨離せざるなり。

行住座臥に常に如來を憶念し靡離に之を〇ふて念々常に捨てざる時は早晚に心眼即開することを。

心眼開く時は即佛を見る。佛を見るが故に我が心と如來の恩寵と交感し融合す。如來の聖靈を感ずるが故に從來の主我脱却し如來の聖意に變化す。これより後は如來の無作の聖意と自己の心靈と致一するが故に、たとへば泉の湧出する如く如來の泉源より自己の心靈に聖德流れ出づ。歡喜極りなくこれよりは如來我心眼の前に現在する故に我この身はこれ如來の宮なりと知る。

心情は常に如來の光明界中に安住するが故に平和と歡喜と極りなし。常に如來に

一一二

歸命するが故に如來は常に吾本尊として照鑑し給ふ。如來を念ずるが故に吾如來の中に安住して平和の生活を得るなり。

これよりは、この肉體はかはらねどこゝろは菩薩聖衆の數に入り如來指導のもとに生々動せん。

一一四

## 感情の親愛

人には肉我と靈我との二面存せり。

親縁の主體は人の心情の如來に對する靈戀是なり。

愛慕即靈的戀(親縁。近縁。増上縁)

## 異性相愛

人の心には肉我と靈我との二面存在せり。肉我なるものは同氣相求むと云ふ如く同性相愛は自然の理ならんかと思ふに事實は然らず。異性相愛親和は天然的に生理の規定として存せり。

衆生と如來とは同一の法身を體とすせば理性に於ては相方致一すべき理なるも、本質内容に於ては如來の純淨たる聖靈的なる衆生の煩惱汚染なる心情と此正反對なる異性が如何にして親愛相和の關係を可能にするやとの疑問起らんかなれど、此反

一一五

對なる兩性が還つて相愛密接の關係を希求する性能の存する事は生物の異性即雌性と雄性とが同性に對するよりは却つて異性相愛親和の密接なる關係をなす性能を有する例に於ても知るべし。

而して異性相愛の性能存することは肉我が自然の生理的に規定せられたるより生じ靈の生佛相愛の性能存することは神の宗教的靈的規定の天則なりと云ふも不可ならざるべし。肉我が異性相愛なるものは生理的衝動より生じ靈我が神の靈を戀愛する情は靈的衝動より發る。

人には肉我と靈我との二面ありて肉我の感情のみを完全に發達すとも靈我にして發展せざらんか他の動物と何ぞ擇ぶ處あらん。

肉我の感情が異性ととの相和を求むるは生物の天性なるも亦動物の祖先より襲ひ來りし遺傳性とあれば人に情の存するは言すもがな而も之が爲には此慾心を満たしめんが爲には全力を盡して求むる事は凡ての動物に於ても知らるべし。

人は肉我よりは尙一層高等なる靈我の生活とならんには此の對象となるべき衆生と、異性なる如來の聖靈に感接して此の靈と相愛親和の關係によりて靈の生命に入るにあらずや。

靈我が如來の聖靈に感接せんとの愛戀は靈的衝動的憧憬として現はる、此靈戀感情こそ、如來の聖靈と相和靈的感成して靈の生命に入るなり。此靈戀てふ感情こそ孔子が賢を賢として色に易へよと言し言は好色を愛する程に賢者を愛慕せば己も亦賢者の同侶たらんとなり。

異性を戀愛する程に靈を愛戀することあらば必ず聖靈に感觸すること焉んぞ夫れ難からん。左れば聖法然は、

「かりそめの色のゆかりの戀にだにあふには身をも惜みやはずする。」

世の人々は肉我の有限なる假初のことにも甚しきは身をも命をも忘るるものさへあるではないか、況んや靈の無限の靈福と永恒の生命となるべき靈界に靈我の感情を満足し得べき對象を求めて止まざる時は必ず得らるべきものぞ。

法華經に衆生已に信伏し質直にして意柔軟にして而も戀慕を懷き一心に佛を見んと

欲して自ら生命を惜まざれば大愛の化現たる佛最も麗しき可樂見其身を現じて爲に説法すと。

如來の靈應身なるものは衆生が一心に如來を見んと欲する靈戀の強き力が法身との感應によりて客體化して現するものにしあれば聖靈を愛戀する結晶とも云ふべし。

如來は本來このかた第一義諦清淨智慧の相として宇宙に滿るとも衆生の靈戀あらざるよりは靈應の妙相現すべきなし。

### 如來の妙色身は大愛の化現

肉と靈とは本より清濁天懸するも亦自然に同一形式存する様に思はる。

生物進化の理に生物なるものは原始劣等なるものが次第に進化し來つて現在人類の如きにまで到れる原理は自然に生物を淘汰する自然理法ありてなりと。亦雄雌淘汰の理法とは生物の雄性なるものが異性を求むるに異性の愛を購はんが爲めに専ら勤勉したる結果累代に發達して美を呈するに到れりと。異性の愛を得んどの性力が愛を得んには善にあり。或は色の美、聲の善、鳥類に云はゞ孔雀の尾鰭の聲の如く皆異性の愛を購はんと性の自然より淘汰せられて發達したるを雌雄淘汰の理と云ふなり。

月隨天懸せる神人の關係に於いてもそれと相似たる例を見る事を得べし。宗教的客體なる神の表象たるものは最勝最美の一切に超絶したる妙相を以て其身を莊嚴して衆生に對面す。而も衆生に對して最強度の愛慕を惹起すべき動機即ち宗教的靈戀の對象者たり。

如來妙色身、世間無與等、無比不思議、是故今敬禮。如來色無盡、智慧亦復然、一切法常住、是故我歸依。如來の勝應身は八萬の相好光明遍ねく十方を照し滿身の愛を以て衆生の信愛を照覺す。

如來は本第一義諦智慧の相なれば、世諦の相としてこぼるゝばかりの愛嬌の姿を以て衆生に對する理は無いなれども、如來の活動力なる大愛は凝然真如または無相寂滅と云ふべき非動の物にあらず。如來の妙色相は愛の權化なりと云ふべし。如何にせば衆生の信愛を得べきぞと全力を盡して衆生を求むる様に吾人の感情には感じ得らる

如來の本體は一切諸佛が同じく證覺の智見を以て相見する時は平等理智彼此の相なし  
 若し一切諸佛は同じく如來法身を體とし其内容に於ても全然一致したるものせば  
 同氣相求め佛陀はまた佛陀を求めて相愛の力を注ぐべきに左なくして却て其性質の反  
 對せる凡夫汚濁の衆生を求めて親和力を注ぐとは何ぞ夫れ奇なるや。  
 是また異性相愛の宗教的理性の天則と云ふなるべし。

### 靈の愛

如來は本第一義諦にして世論の相は離れたるものに在せども唯一切衆生を愛する處  
 絶對的愛として衆生に對して滿面の愛を表して衆生に求め玉ふと云ふ事を信知する時  
 は吾人が宗教的衝動は大なる愛との親和を得んが爲に靈的憧憬として一に神を愛慕し  
 て之と交感せんことを願ふは是宗教的要素に豊富せる感情即ち宗教的天才に於ては  
 殊に然るべし。

古來プラトー的の戀など、是れ靈の憧憬靈の戀なり。若し靈戀の深き感情にあら  
 ずば最親密なる感情調和は難かるべし。

靈界の偉人宗教的たるもの感情は實に一種言ふ可からざる靈戀の不可思議的感情な  
 るものが、精神眞髓に存して赫々耀々として活動し、理想を高尙なる神の中に投影し  
 身は茲に在つて想は美天國に逍遙する如き、龍樹天親の頭上には化佛常に耀々と光を  
 放ちしならん。我聖源信が「ぬれば夢さむればうつゝ束の間も忘れがたきはみだの面  
 影。」とのたまへる此聖者の宗教的感情靈的憧憬は知るべきなり。大愛の権化たる靈力  
 は聖者の胸中に往來し活躍し耀々として光を放ち實に斯る不可思議なる靈能こそ是全  
 く高僧を源信如來とまで衆人が歸依を拂ふべき靈格化し給ひ來りしなり。聖法然が  
 「我はたゞ佛にいつかあをひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」  
 「あみだ佛と心は西にうつせみのぬけはてたる聲ぞすゞしき」  
 佛陀の愛は斯る感情の中に宿るべし。如來の靈は此の靈的衝動に在つて活くべく、  
 斯る感情こそ如來の靈を請すべし靈界の偉人と呼ばれ宗教界の豪傑と稱せらるゝもの  
 に斯る經驗なきもの無かるべし。彼の一休宗純なる僧あり。洒々磊々彼が如きもの少

なからん。彼は世の名利に對して無貪着なるに拘はらず宗教的感情に富める事を知る  
 べし。

世に一休譚あり。本々譚なれば後人の作かは知らず。然れども彼が求道者としての  
 修行中のものは彼が宗教的感情を穿ちたる如し。彼青年の時専ら座禪し工夫する時に  
 鬚髮長くのび顔色憔悴せり。時に信者居士等が之を愁ひて醫師をして診察せしむるも  
 曾て異狀あるなしと。在俗の輩彌々之を憂思し謂らく和尚年若しは世の青年を  
 煩はす處の戀なる神の業には非ずや和尚の身を惜しくや思ひて問ければ和尚竊かに  
 紙筆によりて其の實を陳ぶ。

「本來の面目坊が立ちすがた一目見るより戀とこそなれ我のみか釋迦も達磨も阿羅  
 漢、此君故に身をやつしたれ」。

他の人戀てふ事は性肉的愛戀のみと知るも靈的愛戀こそ靈界の偉人を産出する原因  
 なる事を知らずや。

此の譚に記する處、全く一休和尚の宗教的感情を露發したるもの又何人か此の靈戀  
 に依らずして靈界の美人に接觸することを得べき、本來の天眞佛は見る事を得じ。

### 靈の戀

世に極端なる利己主義を主張する輩あり。彼等は謂らく凡ての生物は利己を以て本  
 能とし己を愛する外に他を愛するの本能なしと云ふは余り極端ではないかと思ふ。人  
 類には本能的に一種不可思議の感情がありて人の精神生活の中心に伏在せるに非ずや  
 彼は我と彼自と他とを同一視し異身同體の如くにまで利害を共にする能力あり。是何  
 ぞや愛なる者はなり。

此愛なる者は最も強き感情の糸を以て我と彼とを維繫す。普通はこの感情の糸も強  
 き者は親と子との間に亦異性の間に現する者に於て然りとす。

生理の自然に約束せられたる異性の親愛は最親密なり。然れども客觀的に形を異  
 にしたる異性の間に見る處の親密なる者よりは尙一層深く彼我の親密なる感情の存す  
 る事は宗教的感情即ち神に對する靈的戀愛なるものに發見すべし。

斯る宗教的感情が神秘的に神と合一し小我と大我の冥合せる如きは人と人との相愛の夫れよりは親密である。

小我我が無限大なる真我と冥合する事を得。靈戀の愛なるものは純潔にして清淨なり。神を愛し神に愛せらるゝ此の相愛の關係より出来る愛なる者は肉我の愛とは異にして神より愛によりて愛化せられ又博く一切の衆生を愛する仁愛となる。

如來の相愛々化は親靈の中心にして是心情の信仰と云ふべし。此の如來の愛と融合し得る先驅としては感情の愛即ち靈愛である。靈を戀愛する感情なり。

此靈戀こそ宗教的生命に入るべき發足點なり。靈戀なくして神人交感の妙を得べきなし。神人交感は人の心靈を神の靈と融合して靈化する妙契機なり。

靈戀は人を神化する

絶世の英雄も肉の奴隷となり肉我愛戀の爲に斃さるゝ事を免れざるは無明の雲心にさへぎり罪惡の種子内面に伏在すればなり。

宇宙洪漠なるも世界廣大なるも以て精神を照す光明にして無からんか、靈の偉人が出世せざらんか世は闇暗なり。宇宙をして心光普く照し一切の心靈を度脱する處の聖者は出たり。斯る聖者は肉の愛より生したるものに非ず斯る聖者は靈の愛により妊娠せられたり。

思ふに其身は四海を保ちて萬乘の高きにあり天下の榮耀を己一人に聚め金殿玉樓に身を安んじ珍寶瓔珞に膚を飜り三千の後宮は間斷なきまでに娛樂を供し深閑は最も愛情を濃にすべき皇妃は天下に亦なき艶姿を賢明とを共に備はり滿腔の愛敬美を以て常に側に侍るあり。加之玉の麗しきを呈せる愛子を己に設けたる恩愛の情葦とも深き處の父王。いかに悉多太子の要求なるか。

肉によるの愛は鹿なるを觀し靈によるの親愛の妙なるを慕ひ人間界中またも得べからざる位もまたなき榮花をも破れたる履の如くに捨て、専ら靈界を愛戀したり。

若し肉我の生活としては又之に加ふべきあらんや。斯る恩愛の情をも顧みざる太子は人格の要素たる感情なるもの缺けたる冷酷なる人なりと云んか、否決して太子は人格に於て缺點ある人にあらず。平凡の人よりは豪豊富に豪闊満なる人格なること

は言までも無らん。然て彼の賢婦ヤスタラを愛せざるに非るべし。愛子ラフラを思はざるにはあらざらん。又父王の恩愛を感せざるにはあらざらん。されどもよりはく、豪も深く豪も厚く愛すべく慕ふべき者あればなり。

瑠樓にありて百千の姪女は麗きを競ひ芳きを争うて各百般の伎藝を盡して太子の歡樂の器具を奉るも敢て樂とせざる太子は玉床に坐して沈思默考憂色に堪ふ可らざる者に似たり。如何なる天の伎樂も樂とせず如何なる珍膳も亦甘きを覺へざるが如く唯鬱々として而も寢食を忘るる迄になり給ひぬ。抑は何の爲ぞ。

抑も美壯年なる太子に豊富なる感情なるもの精神的中心に存在し理想あり戀愛ありとせば太子が理想せる處の戀愛の對象は是那邊ぞ。若し無明闇痴の雲はれて本覺直如の空清き。

舍那圓滿の月、顔、見まくほしさに戀すなれ一度び肉の我となりし、罪の衣を被し身には慕ふ心は深けれど、逢坂の關趣え難く

是だに稱はぬ世なりせば、活き在ふべき甲斐やある狭き心にあらなくも、深き思ひに沈みける堅き心の一節は、巖岩をす徹すと聞からは金剛不壞の意志をもて、恩愛緊縛の綱を斷ち

娑婆即常寂土、舍那清淨の法の身は妙なる娑婆にして、現在說法と聞きつれど肉の心につままれし、無明の雲に覆はるゝ此土と彼土とは一重なる、無明の雲を隔つなれされど濁りの世になへて、塵のちまたを立ち出で、しすけき山に入りてこそ、靈き國は開き見ん

世を去りて太子今は先づ身の緊縛を解れたり。誰を媒介と頼みて我理想せし靈世界の美人を我が物にせばやと。時に名にあふ老仙あり其名をアララと云ふ。太子は此老仙を訪ふて己が所願を陳べにける。抑此老仙は年壯にして世を遁れ修道行法功積りあらゆ

る仙中の仙なりとかや。

太子此老仙に己が所願を陳べければ老仙は威嚴神の如く爛たる眼光は電に似たり  
權威ある聲を以て謂へらく嗚乎壯年なる求道者よ汝真理の靈界に入て眞天の面目を見  
んと欲せば先づ從來の有し來りし迷妄罪惡の心を脱却せよ。肉の我なるものは罪惡で  
ある。罪惡の源は迷である。迷の源は冥初である。此の冥初の雲はるゝ時は四禪  
の空は澄々として清らかにならむ。

汝知らずや無窮の蒼天に日月星辰の燦然として光を放つは是四禪天を掩ふ處の幕な  
らずや。汝が冥初の心の迷の露る時は暮は自ら開け非々想天の殿顯れん。

斯の非非想こそ宇宙最頂の處にて此に比すべき天はあらじ。汝が理想せる處のもの  
果して茲に得べけん。

太子即ち道士は老仙の教に隨ひて寂寞無人聲の床に坐して深禪定に入にけり。さす  
がは天性微智深遠なる太子は老仙が數十年間勵修苦行の結果として獲得したる四禪の  
宮殿は未だ數日間を経ざる程に正に得たり。太子今は冥諦の雲はれて四禪の空は澄渡  
り非々想の靈宮は已に認めたりしも未だ自ら會て理想したる眞如の月の而を少しも見  
ざれば、畢に本意なくて老仙の下を辭し去るの止むを得ざる事とはなりぬ。太子ツラ  
ノノ謂ふよう抑宇宙最終の真理なる自己の一大原因なるものは自性天真と聞くから  
は自ら一心の極むる處に求め一切の迷妄悉く斷盡せる處に自性天真は見る事を得べ  
し、舍那圓滿の妙なる姿見る事を得べし。

未だ白から其靈象に接するに非るよりはいかでか内心の安きを得ん。左れば詩經に  
窈窕たる淑女蘇思之服之不得展轉反側。と太子はマカタク國菩提道場なる樹下に金剛  
石上に坐を占めて菩薩は如何に焦慮苦心せしや(以下斷篇)

### 彌陀の本願

盡十方無礙光の中に在ることを信する吾親愛なる教友にまで申す。

人々皆其本源身體精神も共に法身如來藏より稟けたる之を佛性と云ふ。人々皆心性  
は彌陀の法身を根底にしなから肉體と共に心も主我の執着と罪惡の皮殼とを破ること

誓へば鑽石の中に金性の有る如くなり。

人々佛性を具備すると共に罪惡も必然的に具有したり。此の罪惡の皮を除き去りて  
彌陀の法身より稟けたる自己の眞性を顯現することは是自己の力の及ばざる處なり。  
いかにしてか元來賦與せられたる佛性を發顯することを得るとならば、彌陀の聖旨  
なる本願を仰ひて信じ彼の恩寵に依りて解脱し靈化する外他に道有するなし。

彌陀の本願と云ふ即ち彌陀の意志なり。あなたの聖旨とは法界に滿ち渡りて常に衆  
生の信仰心に感應して解脱し靈化せしむる處の勢力なり。あなたの聖旨は處として在  
らざるなく活動せざる處なきも信仰なき人々は空吹く風とまでも思はでむなく日を  
明し暮して冥きより冥きに入るものにてぞある。誰に彌陀の身心は彌法界。映現  
衆生心想中是故勸汝常觀察と。言ふ心は、あなたの眞身と智慧の心は形こ  
そなけれ何れの處にも實在していままぬ處こそなけれ徧ねく滿ち渡る眞身なれば  
人々の心想の中に映現するので在るけれ共、衆生自ら信仰の水すまざれば之を知ら  
ずして居るのである。能く深く心を留め神を凝して觀るときはあなたの眞心の中  
にもとより住める我身にしてあなたの智慧と慈悲とに包れたる我心なることは確かに  
意識せらるゝのである。

如何に心を用て阿彌陀如來の身心の中なる我身なることを諦らかに意識せらるゝの  
であらうと問はゞ聖の本願の文に  
至心、信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺と云ふ上の三句を安心の三  
心と云ひ次の乃至十念を起行の念佛と云ふのである。信者の安心起行にして最も大  
事のことである。

至心とは導師は眞實心と釋し、眞實心はもと佛性として自己の根底に潜みて居るけ  
れ共我てふ迷に覆はれて人は虛假雜毒の非眞理なる心となれり。今彌陀の聖名に依り  
て我の迷なる事を覺りたる時眞實心と引換へて給はる。あなたの聖旨は純粹なる眞  
理のみなれば我を捨て聖旨に隨ふ時眞實心は現はれるのである。

虛假雜毒の心にて可と思ふはあなたの聖旨を信じ得ざる故である。あなたの聖旨を  
得れば我てふ迷の雲はれて眞實の心月の如くに顯るゝのである。



我執より起る心は虚假非眞理にて聖旨より顯るゝは眞實心なり。あなたは眞理なり非眞理はあなたの反對なるものなり。

次に信樂とは信とは深くあなたの聖旨を信樂して疑はず。樂とは深く信順して背かざる斗りてなく信樂と云ふは深く聖を愛樂する心なり。一切の萬物の中に於て最も深くあなたを愛するなり。我身よりも命よりも凡ての者よりも聖を愛するなり。聖を愛するは自己の眞心を愛するので在り。聖を愛するが故にたとへ肉體の生命は失ふとも聖を愛する時は此の精神を聖は眞生命の中に我を愛して攝取し給ふて無限の光と壽とに同化し給ふと吾人は信じます。人在りて汝若し阿彌陀佛を信する事を捨てざれば汝の生命を失ふべしと云はゞ余は喜んで生命を失ふも信仰を捨つるに忍びず。其故は眞生命と肉の生命とは換る事能はざればなり。何れが一地の土と無價の金剛石を換るものあらん哉。

又一切の萬物は盡く彼の佛の有なり。故に彼を愛し彼に攝せらるれば萬物は自己の所有となるなり。

又我は全體を愛するが故にあなたを愛す。凡て萬物は一としてアナタの一分ならざるはなし全體は唯獨り絶對なり阿彌陀のみ。故に萬物にこゑて獨りあなたを信じ愛樂するなり。

欲生とは即ち欲望なり。何を欲望するか即ち阿彌陀佛國なり。阿彌陀佛國とは一切萬物に超越せる眞理なり。即ち至眞と至善と至美となり。眞善美の靈界最高圓滿の處を神の國又は涅槃界或は淨土といふ。我等の欲望此處にあり。即ち眞佛の世つきたらん事を望むなり。凡ての物は朽ち壞る事あるも眞理の靈界は不變不壞なり。眞理の靈界は不變不壞の故に無量壽國といふ。圓滿至善の故に報土と云ひ、最靈福の故に極樂と云ひ、最清淨至善の故に淨土と云ふ。

終に朽ち果つべきものは最終の目的とするに足らず。非眞理は眞人の欲望する處にあらず。我等の欲望は彌陀の世つきたらんことなり。これ無上の位置に到達して無窮に神の働きを以て所有萬類を救済せんが爲にして幸福主義の欲望を充たさん爲に彼の國を望むにあらず。

彼國に生れんと欲する者は此の生命終つて始めて生ずる者に非ず。此肉體を轉せずして、唯天然の意志を轉じて、彌陀の眞生命に入り、彌陀大我の中の自己にして阿彌陀を離れたる個人なるに非ざる事を知り、此身は彌陀の一切處に徧周せる性能を實現せんが爲の身たる事を意識して、彌陀の眞意實現として行動せば足るのみ。眞實彌陀の眞我の中の我にして阿彌陀の生命の中の生命たるものを知り之に依つて行動せば此精神此儘無量壽の分身なり。此命を捨て始めて無量壽國に入るを待たず。

阿彌陀は此目的の爲に我等に法身より此身を分出して人間界に現出するので、眞に此理を信する時は此身も心も本より法身より分出したので、而してまた報身の光りと壽とに歸命融合して始めて眞理が現はれて來るのである。左ればとて此命終りて眞實に淨土なきに非ず。彌陀の實在は眞實にして此世界の假りのものなる如くには非ず。不變不壞にして常住なり。此身の果には實在の眞實妙界に歸入するので、いはゞ精神が淨土に住み遊ぶのであると信すべし。

斷へずあなたの聖旨の實現せんやうに聖名を崇めて祈り奉らん事を至心信樂欲生我國

眞理と愛と望との三徳なり。此眞望愛の三徳は如來の勅命として若し之を具へねばならぬものなれば能く願ひ見て眞實心なるや信愛なるや靈界の欲望いかに深きやを願ひよ。是を安心と云ふて如來の恩寵に對する信仰心なれば是非共具へざる可らざる必要なり。

乃至十念とは 信心の開發なり實行なり。感情 實現 平和安樂歡喜 眞と愛と望との意志によりて一心にあなたの聖旨の實現せん事と日夜行住坐臥に祈り慕らして絶へざれば、聖旨の實現として、内容に顯現して或は光明と現じ或は慈悲の御心とあらはれ、漸々に進み行けば彌陀の中の自己なりと定まり諦らかに識られてよりは、内面に顯現する斗りに止まらず、口には語となりて現れ眞實語愛語となり、身の行爲に現れては道德の行爲として菩薩の行となり來るのである。

十念とは阿彌陀佛の聖徳を表彰する聖名、聖名に依りてあなたの聖旨をうけ聖旨が

内心に現はれては佛智見開發となり心悟には融合安立となり意志には實行となりて三業（身と口と意）佛の如くの行爲に現はれるのである。之を略して乃至十念の起行門と云ふ。

聖旨を領して信心まことに獲る時は我もなく彼もなく形質は暫く別々なれ共内心は同じく彌陀の一味の海水なれば之や諸上善人とも清淨大海衆とも申す事なり。願くば聖旨の實現せん事を祈り奉らんことを。

## 慈悲の御親

佛を御親とし、衆生は子にして、これを布延して御話しいたします。

佛の御親と子の我等が間を例へば、こゝに家富み最も榮へる家庭に唯一人の男子が在つた。まだ頑是なき幼兒、花に戯むるゝか蝶でも追ふて、知らず〱門を出て、外に歩みて居り、其の人形の如くに麗しき兒は、そこを通る乞食の眼に映つた。可愛き兒、ボーチャン、あなた蝶が欲しくば私が捕へて上げませう、と頑是なき兒の憐れやついに乞食の扱かざるゝ處と成つて乞食の群に入り、本は門閭の兒でありし豪富の兒も飢にせまれば乞食の子に歸し、心と雖も年久しくなるに隨つて、遂には本の生れ付の乞食と同然なる。

全體少年の功名心や虚榮心などは環境から養はれて起るものである。少年は俺は偉い人に成ると云ふものであるが、乞食の中に在りては功名心も知識欲も發するものではない。憐れや此兒は本々光榮ある身分に生れながら斯の如き淺間しき非人に化して

いと十才計りの時にフットした事から遂にかやうな思想が浮み出した。あの少年衆は頓て立派な人物と成るに相違ない、我も同じ人間に生れ乍ら彼の少年の如くに人物と成ることの出来ぬのは歸する所自分には教育をして呉れる父母がついて居らぬ。彼の子供等でも自己の力で偉い人に爲ることはできぬ。全く親の力を被らねばならぬ。然るに俺には彼等の如く教育をして下さる親がついて居らぬ。我とても人間に生れてをる。親の無いわけではない。其の親の力を被れば偉い人に成れぬことはない、胸の中に浮んだのが動機と成つて、是より親をたづね親に逢はんとの心念が深くなつた。是までは日々を思淺間敷も食ふ事を思ふ他餘念なかりしに、人間性の奥に潜める心が發いて、始めて眞の親をたづね親に逢つて親の教養を受けたいと云ふやうな眞の人間の心が浮び發つた。

されば只親をたづね、親に逢ひたいとの一念に成つてより、心を潜めて熟々考ふるに四五才の時慈深き母の温顔が夢幻の如くに奥底より浮び出た。其面相をたどりて眞の母の慈顔に接したき心が深くなつて、逢ひたさが禁すること能はぬまでに成つた。また一方母は自ら思ふに、いかに豪富も財饒なるも之を譲るべき子なく、また自ら學あり藝あるも之を傳ふべき子なきことは實に寂寥に耐へず。木より子なきならばまだしも、本我子世にありながら之を子に譲ることできず、傳ふること能はざるは實に本意なきこととて、深き慈母の胸には子を憶念して捨ることなきも、これまでは母はいかに子を念ひ給ふとも子は母在すことさへ忘れたりければ如何とも爲ること能はざりしに今は初めて子母を憶念して止まずなりぬ。親より子を憶ひ子より母を想ふ。兩方の憶念が相互に念じて餘念なく無我の狀と爲る時はたとい千里の道隔てゝゐるとも相方の念が感應する時は宛然として相逢ひ相見ること現に相逢ひ見るが如し。

我らは靈性は具すれども未だ開けず只肉の我計りを愛して端なくも六道の乞食と爲れり。未だ曾て靈の御親在すことを識らざりしに、念佛三昧に、佛なる親を念じて、如來は眞の我が父母にてあればこゝを離さず。如來はつねに我々を憶愛し給ふ。我等一心に御親に逢はんと欲して慕つて休まざれば髣髴として現前に在すことを觀ることを得、若し現在にもまた當來にも、大悲の温顔を拜し、慈悲の御顔を瞻むときは、

また慈悲の御聖意をも知ることを得らる。佛を見たてまつれば、本々佛より受たる佛性は、久遠劫來御離れ申してはまだ御名をだに聞くことなかりし如來の眞實の慈父其御親が滿腔の慈悲を以て我等を愛しみたまふと聞いて、我等いかでかミオヤを欽慕戀念せずして居られやう。一心に「我はたゞ佛にいつかあをひ草心のつまにかけぬ口をなき」と戀ふる時初めて心眼開けて慈悲の面かげに接することを得るなり。親を離れて子どもの成長することはできぬ、我等の心靈も如來を離れて育つことかたし。

世に一の御親の眞實在すことを識らずして人生を闇の中に暮してまた闇に入る人はど不幸な者は有りませぬ。依つて同胞衆に誠にく〜吾同胞衆に一に御親の聖意を御知らせ申して皆さんがミオヤを眞に御慕ひ申して親子の對面なすやうに（離れぬやうにして）上げてたいと存じます。

愚鈍が吾同胞衆に對してどうか我等迷ひ子を深く御意にかけ給ふミオヤの聖意を御知らせ申して御相見させたいと存じます故ミオヤは可愛き御自分のほんとの御子たちを何の闇の中に迷ふて居るものを放つて置かうと思召されませう。かくまで子に憶ふ親に御合はせ申したいと云ふ事につきて、楞嚴經の勢至菩薩の圓通の告白を紹介して勢至菩薩のミオヤを御慕ひ申なされて、ついに深き心の奥底より慕ひ申たる結果心眼開けて、ミオヤに對面して自然と無生忍を悟りなされた因縁であります。夫は先づかやうな御因縁であります。

釋尊が一時舍鞞國に於て楞嚴經を御説きなされた時に此の經は衆生の心源眞如の深義を明しなされたのです。如來甚深の妙理を聞いて諸の迷の迷の本源を明らかめ、菩薩三摩地により無生忍をえ佛の開示をこふむりて心身皎然。爾時に世尊が普ねく其會に集れる諸の菩薩や大悟せる羅漢等に向つてかやうに告げなされた。今汝等は現に菩薩の無生の悟りまた羅漢の果を成ずるのは、例へば悟の花が開き果を結んだのである。されば此の花を開き果を結ぶに對しては過去に於て初め發心し望の種子を播いた時が無ければならぬ。或は耳より聞いたとか、また眼より視たとか、意に念じたとか、其の悟の道に入る門は各あつたらう。其を此大會の其が本と爲つて今已に圓通と爲つて悟に入つたと各自の入門

の因縁を告白したならば初心の輩の爲に眞門に入るの方便となる。如來の命を被むりて第一番に座より起ちて佛前に出て恭敬禮拜して告白したが、佛の最初の御弟子たる阿若憍陳如の五弟子であつた。廿五番の最後の告白をなされたのは觀世音菩薩であつた。廿四番目に勢至菩薩の告白が今我同胞に紹介いたし度いのであります。

勢至菩薩左なきだに自己の胸中に彌陀の慈悲にあたゝめられて燃ゆる如きの信心を以て、願くば世の同胞等を誘ふてミオヤの光明の中に引入れんとして居る勢至王子なれば、世尊の勅命を被むりて争でか黙して居られやう。從へる處の菩薩等と共に座を起つて佛の前に進みなされて其装は實に嚴かに眞金の色鮮かに六八の相鮮かに百福の莊嚴を以て莊嚴せる人格の巍き青蓮の瞳丹果の唇を動かして朗かなる音聲を以て、世尊の前に跪き、佛の足を頂禮して、恭敬合掌して、丹果の唇動かして、其音聲嚙々として、佛に白すらく、世尊我過去の往昔を憶ふに恒沙劫のむかし、佛世に出で給ふて無量光と名づけられた超日月光如來と號け奉る。我初めて其如來世尊に瞻仰し奉る時、彼の如來は我に念佛三昧の法を教へ給ひき。譬へば人あり、兩人の間に於て一人は専らに甲の人を憶へども乙の人は甲の人を毫も相憶ふことなし。かくの如くならば、若しは逢ひ若しは逢はず。或は見たり或は見ることなし。兩人相互に愛念して逢はんと欲する念ひ深ければ生より生に至るに形と影の如くに離れずして相逢ふことを得るが如く、如來は全く一切衆生のミオヤに在ませば一切衆生の子を憐みて毫も相離れ給ふことなし。

母の子を憶ふ如くであるも假令いかに情深き母我子を忘れず憶ふとも、若し子の身が母の許を逃走していかに憶ふもいかんとも爲すこと能はず、子が若し母を憶ふこと母の方より子を憶ふ如くに深ければ、母と子と生を履ても相逢ひ相見ることを得る如くに、若し衆生の心にミオヤの佛を憶ひ佛を念じて忘れずば、現前にも當來にも必定して佛を見上り、佛を去ること遠からず、方便を假らずして自ら心開くことを得ん。譬へば香に染める人の身に香氣あるが如し。此を則ち香光莊嚴と曰ふ。

# 法喜憚悅

四四

聖典に如來の光明は遍ねく十方の世界を照して念佛の衆生を攝取して捨給はずと  
 意は如來の光明は普徧に照し且れども殊に如來を念する人に御心が感應融合して  
 攝受し下さると云ふことである。善導大師は此意を衆生行を起して口に佛を稱ふれば  
 佛即ち之を聞き給ひ、身に禮敬すれば佛即ち之を見給ふ。心常に佛を念すれば佛  
 即ち之を知り給ふ。衆生佛を憶念すれば佛もまた衆生を憶念し給ふ。彼此の三業相捨  
 離せず故に親縁と名づく。斯心を圖に表はしたので、如來は私共の大御親にて私共は  
 其の子である。親と子との心の融合して、而して如來の強き力にて私共の靈を育てて  
 靈化して下さるのである。

さて大御親に常に衆生を救ひ下さる慈悲の光あるならば何故に私共に分らぬので有  
 らうと云ふ疑が起る。そは肉體でも赤子が初の程は、母親の容が見へぬのであるが  
 漸に形體が發育に随つて母の容を見て悦ぶようなもので、又私共の肉體も初母の乳に  
 て養はれて成長すると同じく心靈も矢張り同じ形式に、信仰心が育つて行くのである  
 然らば何にして信仰心が出来、また増長で有らう。そは赤子が初めて、産聲を擧げた  
 時には母の容は見へぬとも、啼く音を便りに母の方から乳房を含ましてくれる乳を呑  
 むから次第に成長する。私共の心靈も、光明名號の眞理を聞き、如來は全く私の靈  
 の御親であると確かと自覺した時は、恰ど靈の子が生れたので、眞から稱名の聲が發  
 する様に爲つたのが心靈の産聲である。名は稱ふれ、まだ如來の慈悲の御顔は拜めぬ  
 けれども、稱名の聲する處に大御親の靈の乳は與へて下さるのである。念佛心に心  
 光の乳は感愛るので、それが靈を養ふのである。如來を念じて止まざる時は、心疑が  
 益々發達して慈悲の温容を拜めるようになれる。また能く常に御慈悲の懷の中に安  
 住しつゝある身であると思はるゝ。

如來の恩寵に信仰心も育てられ何時も懐しい親様と、寢ても甯ても、共に在つて離  
 れぬ様に想はれる。然すると此の弱き私共の心の生活に、いかに力を得るか量られま  
 せぬ。而して肉體も命のある限りは、日々の食糧なくては應はぬ如く、心靈の信仰の

四五

命も、靈の食物がなくてはなりません。一心に念佛して如來の恩寵を被むる、然する  
 と靈威をえて常に靈が養はるゝのである。心靈の法味即ち信仰心に感受する糧に二  
 種に分つて見ると、一は法喜と云ひ、一を禪悅と云ふ。

法喜を得れば何いふ感しがするとならば、眞に信心が成熟して、靈が開發したる上  
 には、從來とは心機一轉して靈の曉となり。夫からは氣分は快廓浩漭として天地も  
 一變した様に思はれ、温暖なる和氣に、麗はしく櫻花の笑める如く、靈氣の卓めたる  
 中に、心の花開きて、常盤の春の長閑なる氣分となるを法喜と云ふ。次に禪悅と云ふ  
 のはまた三昧樂とも曰ふ。此は一心に念佛して、無我の境に入ると、如來の恩寵と自  
 我とが神秘的に融合する。この時の得も言はれぬ悅樂を感ずる時の靈味である。法  
 喜も禪悅と同じく、宗教心に感じ得らるゝ妙味で、神を養ひ、心を快活にし、ま  
 た心廣く體肝かにならしむる感情上の興感である。

引命のある活ける信仰は、斯る微妙の味ひを以て養はるゝが故に、活動の原動力と  
 も成るのである。世の人、肉體には和洋の料理に美を味ひ、口腹を恣にするも、心  
 靈に極りなき靈味を感ずるなき爲に、終身肉の奴隷たることを免かれぬ者が多いので  
 ある。

斯かる妙味を以て、心靈を養ひ、靈的生活に入るは、いかに幸福でありませう。實  
 に斯様な生活に入るに非ざれば、眞に人間の身を受けし甲斐はないと私共は信じます  
 諸彦よ。自己の心靈が、如何なる聖き食を以て養はれつゝあるかを省み給へ。實に  
 日に三度の食よりは尙尊き、靈の糧を求めて、心靈を養ひ、清き生命となり、今此の  
 現世を通じて永遠の生命を保ち、清き御國の人となられんことを御勧め申します。

四六

大正十二年三月二十日印刷同二十五日發行

誌代年六册登貳拾錢

年十二册貳圓

編輯兼發行人

山崎

辨成

印刷人

秋場

熊太郎

發行所

ミオヤ

のひかり社

東京小石川區水道端二丁目四十四番地

振替東京四九三三八番